



下関市長の部屋

検索

<http://www.city.shimonoseki.lg.jp/>



下関市職員簿記学校の1回目の研修で中尾下関市長から「名誉校長」の委嘱状を受け取る石原関西学院大学教授(右)(8月8日 下関市役所)

市役所全体で簿記に取り組みます 下関市職員簿記学校

んにちは。市長の中尾友昭です。少子高齢化による生産年齢人口の減少、社会保障費の増大など、地方自治体の財政状況は、今後さらに厳しくなることが見込まれています。

地方自治体の会計である地方公会計を改革し、経営管理を強化することで限られた財源を「賢く使う」ことがますます重要となっていく

ます。地方公会計改革は、本市に限らず、全国の地方自治体に共通の最優先課題と言えます。

平成26年4月に総務省から全国の地方自治体に対して、平成29年度中に複式簿記による新会計基準を導入するよう要請がありました。複式簿記とは、家計簿のような収入と支出だけの記載ではなく、財産や借金の状況も反映されたものです。今後、市役所の全ての職場で複式簿記を理解し活用することが求められます。

本市では、平成23年度から、私や市職員が講師を務める簿記研修を実施。これまでに幹部職員から新規採用職員までの対象職員(約1800人)の3分の1に当たる約600人が受講し、簿記検定資格の取得者も約400人となりました。各職場

でも簿記を学び合う環境が整いつつあり、最近では、土木などの技術職、保健師などの専門職にまで、簿記を学ぼうとする職員が増えてきました。

簿

記研修を「下関市職員簿記学校」と命名し、自学自習の意識を高めるよう研修内容を見直し、既に資格を持った職員が資格取得に挑戦する職員の学習をサポートするなど支援体制を充実させ、研修効果の向上を図ることとしました。私は校長を務め、引き続き講師としても登壇する予定です。

8月8日の第1回研修では、総務省の研究会メンバーなども歴任し、公会計改革の第一人者である石原俊彦関西学院大学教授に「名誉校長」の委嘱を行い、特別講義を行っていただきました。

新会計基準を導入後、「財政の見える化」を進め、市民の皆さんへの説明責任を果たすためには、職員一人ひとりのコスト意識と優れた経営感覚が必要です。市役所全体で簿記を学ぶ機運を高め、新会計基準を理解する職員の裾野を広げ、全庁一丸となって行財政改革を進めてまいります。

江戸時代の下関海峡の景観と廻船を画いた錦絵です。作者は鳥瞰形式の風景画を得意とした歌川貞秀です。



江戸時代に入ると、全国的な交通・流通網が整備され、その中で下関海峡を経由して日本海沿岸と大坂・江戸を結ぶ西廻り航路が成立します。日本海沿岸や西日本などの年貢米は、主にこれらの航路によって「天下の台所大坂」に送られ、赤間関はその中継地として機能しました。

主要航路の結節点となった赤間関には、北国物や唐物をはじめ各地の産物や情報が集散する

しものせき ナビ vol.71

行って! 学んで! 博物館!

錦絵「長府の沖」
歌川貞秀筆

下関市立歴史博物館蔵
(11月18日オープン予定)



寄港した廻船でにぎわう赤間関(模型)

て赤間関商人が活躍しました。特に日本海沿岸から赤間関や大坂・江戸を目指す廻船は、北前船と呼ばれ、この地に大きな富をもたらしました。

本図の中央に描かれた廻船は、22反帆(帆の幅が約16メートル)ですから、約700石積と考えられます。上方物を積み込んだ船を巧みに操る船員の姿まで生き生きと表現されています。「出船千艘・入船千艘」などと形容された赤間関は、全国的な名所の一つとして錦絵に取り上げられることが多く、そのにぎわいは全国に知れ渡っていました。